

自主発表

「般若心経」を読む

I 発表内容

「般若心経」の解釈には諸説ある。

その中の例を3説紹介され、その後、発表者自身のオリジナルの〈新解釈〉についての発表が行われた。

〈新解釈〉

（1） 観自在菩薩

ブッダは弟子に法を説いたが、一言も書き記してはいない。後年、ブッダの弟子たちが教えを書き記したものが数多ある教えであり、その神髄が大乗仏教で「般若心経」にまとめられた。ひろさちや、般若心経の中で舍利子を論じているのは釈迦ではなくて観自在菩薩であるとして次のように述べている。

大乗仏教は上座部仏教(小乗仏教)を出家した人間だけが救われるエリート集団、エゴイズムの仏教だとして批判しており、舍利子が上座部仏教の代表的存在にされて論される形で書かれている。「舍利子よ、あなたの仏教の考え方は間違っています。このように考えなさい」という。舍利子を論じているのは釈迦ではなくて観自在菩薩というのが学問的解釈のようである。(ひろさちや、2009年、122頁)

このように「観自在菩薩」は一般に「観音菩薩」として解されている。だが、秋月龍眠は「観自在菩薩」は「本来の自己」「真実の自己」のことだとする。

禅者は、「観自在菩薩」は自己の外に見てはならず、この菩薩は、「心眼を開いて観る」と「自らに存在する——自らに存す——菩薩」であると読め、と教えるのである。「観自在菩薩」は、ほかならぬ「本来の自己」のこと、「真実の自己」のことである。そうすると、こういうことになる。「本来の自己が深い般若の智慧の完成を行ずるとき、五蘊皆空であるという悟りが開けて、人生のすべての苦悩が解決された」

(秋月龍眠、1992年、80～81頁)

筆者は、悟りは自身の外部から論されて得るものではなく、自身の中に求め究めて行くものであると考える。菩薩は「自らに内在する」のであり、自己の外に菩薩を見るのではなく、自分の中にある仏性をどう「引き出すか」が問われる。筆者は「観自在菩薩」を「自分の中に菩

薩(悟りの求道者)が在ることを観なさい」という意味として次のように解釈する。

悟りを観音菩薩といった他者に求めるのではなく、自分自身の心の中に悟りの求道者である菩薩が居ることに気付きなさい。深く洞察することで現実のあらゆる事象は空虚であることが分かり、我執を越えた大きな世界観に達する。これが大いなる智慧であり、超個の境涯で生きることによって個我の苦悩から解放されて安寧が得られる。

「般若心経」が仏法の神髄であれば、ブッダが悟りを得た後に最初に弟子へ説いた当時のように表現されるべきである。ブッダは「観世音菩薩」なるものを想定して語ったのではない。観世音菩薩とは後進者の創造(想像)であり、ブッダは誰もが自分自身の中に仏になる素地のあることを観よ、と諭した。

ブッダは人を救うのは他者ではなく、その人自身だと弟子に教えた。嚙己の主」に出会えるには自分以外にない。ブッダ直系の禅ではこの自己を「一無位の真人」と教えている。臨済宗中興の祖・白隠慧鶴は『坐禅和讃』で「衆生本来仏なり。水と氷の如くにて水を離れて氷なく、衆生のほかに仏性なし」と述べている。自己の中にある本来の自己、それを仏性といってもよく、自己の仏性に気づいた人がそのまま釈迦になるというのだ。(『釈迦の本』187頁)

(2) 行深般若波羅蜜多時

…仏様の智慧で波羅蜜多行を深く考え、行う時

(大栗道榮『声を出して覚える般若心経』中経出版、2002年)

…真理に対する正しい智慧の完成を目指していた時に

(柳澤桂子・堀文子『生きて死ぬ智慧』小学館、2005年)

…智慧の完成を实践されたとき

(ひろさちや『知識ゼロからの般若心経入門』幻冬舎、2009年)

多くは「行」を「実践する」という意味で解釈しており、具体的には秋月のように「座禅」をすることとしている。(秋月鯉民、1992年、80頁)

だが、筆者は「行」とは実践そのものよりも行動をうながす「意志・意識」であるとして、座禅の修業に限らず、庭で草むしりをしていようが洗濯物を畳んでいようが、散歩をしていようが、その行為と一体化する意識こそが重要であるとして次のように解釈する。

「…そのものを深く意識していくと、そのものと一体化し…」

人間の内に潜んでいる仏性は瞑想に限らず、そのものと一体化した無我の状況から生まれてくる。何かを实践するとか、完成させるとかいうのではなく、ただそのものと一体化することだ。

(3) 菩提薩唾 依般若波羅蜜多故…

多くの解釈では「菩提薩唾」は「菩薩」「悟りを開いた人」を表し、「菩薩は仏の智慧を完成しているから、こだわりがなく、恐怖もない」とする。

だが、筆者は、「菩薩は自身に内在する求道者であり、完成者ではない。まだ智慧の完成を得てはおらず、プロセスの最中にある」として次のように解釈する。

悟りを求めている者は自身が万物と一体であるという「空」の智慧を得ることによ

って心にこだわりがなくなり、恐怖心もなくなる。

菩薩は、智慧の完成者ではなく、求道者である。

(4) 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃

ブッダは何に囚われず惑わされないことを説いたのか。我執から生じる諸々な煩惱や片寄ったものの見方であろう。だが、ブッダは自我に実体がないことから、古代インドから根強く信じられていた「輪廻転生」が夢想であるとし、この呪縛からの脱却し解放されて安寧を得ることを説いた。「輪廻転生」「梵我一如」を否定克服したのだ。

輪廻の主体は記憶など前世の個性をともなった自己(我=靈魂)であった。自己という不変の実体があり、それに前世の個性がともなうと考えたのです。だが、自己とはそれ自身で自足的に存在するのではなく、他との関係において存在し、しかも絶えず変化する。ブッダはこれを「縁起」として説明した。Aが存在するのはBによってであり、Bが存在するのはCが存在するからである。この無限の連鎖により一切が生じ、滅していくとした。すべては時間と空間の中では仮の現れの姿であり、自我も突き詰めていけば「無我」「無常」である。輪廻転生する自己などない。(『釈迦の本』、61頁)

(5) 「得阿耨多羅三藐三菩提」の意味

サンスクリット語の「アヌッターラ・サムヤックサンボーディ」の音を漢訳すると「無上正等正覚」となり、「この上なく正しい完璧な悟り」とされる。

一般に「この上ない正しい完全なる悟りをひらかれた」と解釈されているが、なぜそのような意味になるのか。どのように「意識」されたのか。

「得」…手にいれる。できる。(鎌田正・米山寅太郎『漢語林』大修館書店、2001年)

「阿」…へつらう。自分の気持ちを曲げて従う。(『漢語林』)

「耨」…鋤で雑草を取り除く。悪いことを除き去る。(『漢語林』)

このことから「得阿耨」は「自分の気持ちを曲げてへつらうといったことを取り除くことができる」と訳せる。

「羅」…羅漢(煩惱を断ち切って悟りを開いた者)

原始仏教における覚者の最高位。仏陀、正覚と同義。順次段階があり、上から阿羅漢果、阿羅漢向、阿那含(不還)果、阿那含向で、ここまでが完全な解脱者。(以下省略) (『釈迦の本』36頁)

「藐」…はるか。遠い。(『漢語林』)

「三菩提」…過去、現在、未来の悟りの求道者

このことから「多羅三藐三菩提」は「多くの羅漢やはるか遠い過去・現在・未来の求道者たち」である。

つまり、「多くの羅漢や遠く時間と空間を超えた過去・現在・未来の求道者たちは自分の気持ちを曲げてへつらうといったことを取り除くことができる」となる。このことから上記のように「この上ない正しい完全なる悟りをひらかれた」という意味になるのかもしれない。

筆者は漢訳をもとに意味を推察したが、般若心経などの神髄には不立文字の部分も多々あるため、サンスクリット語のニュアンスそのものを体得した者が便宜上「意識」して漢訳したのかもしれない。

(6) 波羅羯諦 波羅「僧」羯諦 菩提娑婆訶

悟りの彼岸へ行こう 真理を求めサンガと共に求道者に幸あれ! (河野)

サンガ samgha:

「僧伽」を略して「僧」。自由意志によって共同目的のために作られた組合。真理を求めて仏陀のもとに集まった人々はサンガを形成した。サンガの目的は真理の把握とその実現にある。(渡辺、98頁)

「僧」は「和合」の意味であり皆で一緒に行く。(公方、239頁)

ここで述べられた文言はサンスクリット語の祈りであり、訳すことには意味がなく、言葉の力をそのまま体感することが重要であるとされる。原語を言葉に訳さず、本来の発せられた音声そのものに力が宿るとするのだ。だが、それではそれを理解できる特定の人にしか伝わらない。人が発する音には意味や願いが込められている。漢訳は当て字だとはいえ、訳した者の願いも込められていよう。祈りの言葉や音にはそれを最初に発した者だけではなく、それを聴く者や解釈する者など人それぞれの願いが込められていくため、その人なりの解釈があっている。

(7) ブッダの「舍利子…」への語りかけ

「般若心経」の中でブッダは舍利子へ3度語りかけている。最初と2度目は直接「舍利子…」と呼びかけ、3度目は真言を唱える形で語りかけている。

最初の呼びかけは、「舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是」であり、世界における「現象」の根本原理は「空」であり、自我でさえ実体がないことを説いた。ここでは人間の精神も実体がなく無我であるため、来世での「輪廻転生」を否定している。

2回目の呼びかけは、「舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減…」であり、あらゆる「存在」の根本原理も「空」であることを説いた。ここでは生死の循環から離脱し一切の苦から解放されるとした。

3回目の呼びかけは舍利子の名を呼んでいないが、真言を唱えながら舍利子がサンガ(修行者たちの集まり組織)で修業中の他の求道者ともども悟りが得られることを祈っているのである。

「般若心経」の中ではブッダが舍利子へ語りかけているように書かれているが、舍利子は修行者の象徴であり、悟りを求めている誰に対しても語りかけているのである。ここでブッダの導きにより舍利子が覚醒していく智慧は求道者のものでもあり、誰もが自分自身で智慧を覚醒していくよう諭しているのだ。

(8) 「空」とは

鈴木大拙は「空」を実在に対比させて非実在すなわち空無または空虚だと考え、「私は普通にこれを Emptiness と訳している。」(1989年、18頁)としている。これでは「空」は vacant(空っぽ)の意味になり、「無」の意味になる。

だが、「色」は現象の次元であり、その分別が「有」「無」になる。このときの「無」が「空」なのではない。「空」とは有無を超越統合した無分別の次元であり、「有 or 無」ではなく「有

即無」であり一如である。筆者は「空」の英訳を "one whole-ness"とする。

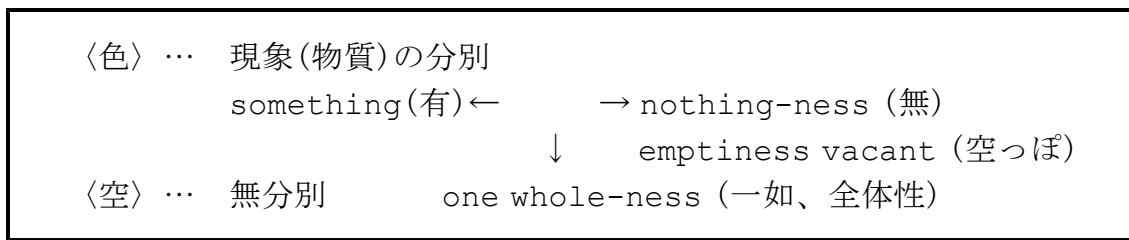


図-1 〈色〉と〈空〉の関係性

「空」は「色」の次元の「有」と「無」を含めて超えた一つの全体であり、この世の現象は永遠不滅の本質をもつものではなく、無常で実体がないが、そのことが事象を生成させているという宇宙の根本原理を表した概念である。変化するものを変化すると認め、実体がないところに実体がないことを認め、一つの全体性に立つことにより苦悩から脱出できる。

柳澤は原子の世界から般若心経の「空」について次のように説明している。

色即是空 空即是色

私たちは広大な宇宙のなかに存在します。宇宙では形という固定したものはありません。実体がないのです。宇宙は粒子に満ちています。粒子は自由に動き回って形を変えて、お互いの関係の安定したところで静止します。「形のあるもの、いかにいけば物質的存在を私たちは現象としてとらえているのですが、現象というものは時々刻々変化するものであって、変化しない実体というものはありません。実体がないからこそ形をつくれるのです。実体がなくて変化するからこそ物質であることができるのです。(柳澤、2005年、6~7頁)

是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減

あなたも宇宙のなかで、粒子でできています。宇宙のなかのほかの粒子と一つづきです。ですから宇宙も「空」です。あなたという実体はないのです。あなたと宇宙は一つです。宇宙は一つづきですから、生じたということもなく、なくなるということもありません。きれいだとか汚いだとかということもありません。増すことなく、減ることもありません。(柳澤、2005年、10~11頁)

物質の世界は動き回る原子でできており、原子の動き回りが濃淡を成していく。密度が高いところが人体などの物質になり、低いところが大気などになる。人体は他の原子であったものから構成され、いずれ他のものに還元されていく。世界は物質の有無、生死といったように分別されるものではなく、一元的であることが真理である。自己と他者とを分別することで欲望が煩惱として現れてくる。だが、自己の存在は他者ともつながる一元的な存在であるという宇宙の真理に目覚める人は物事に執着することなく、何事を受け入れていける。(柳澤、2005年、44頁) この見地において東洋思想と科学が一致しよう。

「色即是空、空即是色」。「色」の次元では物質と非物質は循環するかのようだが、それは対になっており、循環ではなく、即「ある」のだ。「色」の次元の「有」と「無」の全体性が「空」という概念であり、「空」は何もないことではなく、「色」「無」を同時に含む万物創生の根本原理の概念である。「色」の次元で「有」はいずれ「無」になるという視点で見ると空虚で厭

世的になり、無常感が漂う。煩惱も生じる。宇宙は無限であるとか有限であるとか死後存在は有るとか無いとか、どちらか一方に執着する姿勢そのものが迷いであり、渴愛であり、苦である。だが、「有」も「無」も含めて一切を「空」という全体性・無分別の視点から見ると我執を離れ、万物との一体観に達し生死を超えた永遠性が得られる。迷いと悟りとは見る次元の違いにある。しかし、だからといって「空」の世界観で生きることが推奨されるものではない。「色・空」のどちらかに片寄らないで適度なら良いということでもない。「色・空」双方を超越しながら高次の精神段階に高まっていくことだ。それは心を空しくするという消極的否定的な態度ではなく、拘りを離れた精神が新たな自由な境地を開拓していくことである。(渡辺照宏、1965、94頁)

(9)「般若心経」とは

今や苦行を積んだ修行者ではなく、ロボットに変身した「アンドロイド観音」から映像と音楽を組み合わせながら法話を聴く時代である。アンドロイドには煩惱がない。人間は心を痛めた分だけ他者に対して慈悲に生きることができる。人間が「アンドロイド観音」を「崇敬の対象」にすることがあるのだろうか。今日の世相をブッダが知ったらどう思うのだろうか。ともあれ、時代は変化しつつある。その神髄が人々の心の糧となり、生きていきやすくなればそれでいい。

「般若心経」を唱える目的は、宇宙の根本原理を覚醒することにより一切の苦からの解放を得ることである。生老病死の苦から解放され、永遠の次元で生きることだ。それは教を唱えることによって来世を何か大きなものに委ねるとか、葬儀の場で死者の供養のために唱えるといったことで達成できるものではない。「般若心経」は誰もが洞察を深めて宇宙の根本原理を理解することで現世を安寧に生きていくための道を説いているのであり、救いと悟りを求めている人々が共に達成されることを祈念しているのである。我執を超えて生きようとする人たちへの応援歌である。

一生は短い。だが、「般若心経」により心に永遠を想うことができる。

超訳「般若心経」

令和元年5月25日

河野 憲一

根源の教え

悟りは与えられて得られるのではなく自分自身の心の中で覚醒するのです。世の中の事象を深く意識していくと、そのものと自身とが一体化し肉体も精神もあらゆるものが実体をもたず消滅していくことが分かり、苦悩が克服でき、悩みが消えていくのです。

悟りを求めている人よ、この世界の現象の本質は実体のないものです。目に見えている「色」は目にはみえない「空」と異ならないし、目には見えない「空」は目に見える「色」と別ものではありません。「色」はそのまま「空」であり、「空」はそのまま「色」なのです。感じる感覚も、知るといったことも意識や意志も判断する精神の働きも、すべて実体がないのです。

悟りを求めている人よ、このように存在の全てが「空」であるため、生じることもなく、無くなるということもなく、生まれもしなければ死もしないのです。汚れてなければ、清らかというものもない。増えもしないし、減りもしないのです。目に見えるもの、耳で聞こえる音や声、鼻で嗅ぐ香り、舌で味わう味、身体で触れられるもの、意識による認識。これらすべてのものも実体がないのです。迷いや迷いが尽きるということもなく、老いて死ぬということも老死の苦しみが尽きるということもないのです。苦しみやその原因となるものもないので、苦しみが消滅することも、苦しみを克服する道というものもありません。何かを知るとということも、また何かを手に入れるということもありません。それは心が囚われていないからです。

真理を求めている人は自身が万物と一体であることを覚醒することによって心にこだわりがなくなり恐怖心もなくなります。物事を逆にとらえることも、妄想に悩まされることもなくなり、誤った考えから離れて悟りの境地に達し、心が平安になります。

過去・現在・未来の悟りを求める人たちは、宇宙万物の根本原理を知ることによって無上の悟りを得るのです。正しい完全な悟りが得られるのです。

宇宙万物の根本原理には無上無比のすばらしい力があり、あらゆる苦しみから解放されていきます。この呪文は真実であって偽りではありません。では、唱えましょう。

悟りを得ましょう 悟りを求めて修業している人たちと共に
悟りを求めている人に幸あれ！

これが宇宙の根本原理の教えです。

〈参考文献〉

- ・秋月龍眠『『二百七十六文字』に込められた仏の智慧』（瀬戸内寂聴・梅原猛他『般若心経のこころ』プレジデント社、1992年、71～102頁
- ・大栗道榮『声を出して覚える般若心経』中経出版、2002年
- ・岡野守也『唯識仏教的深層心理の世界』NHK出版、1997年、151～153頁
- ・鎌田正・米山寅太郎『漢語林』大修館書店、2001年
- ・岸根卓郎『宇宙の意思』東洋経済新報社、1993年
- ・岸根卓郎『見えない世界を超えて——すべては一つになる——』サンマーク出版、1996年
- ・鈴木大拙『一禅者の思索』講談社学術文庫、1989年、18頁
- ・ひろさちや『知識ゼロからの般若心経入門』幻冬舎、2009年
- ・松原泰道『わたしの般若心経』祥伝社、1991年
- ・柳澤桂子・堀文子『生きて死ぬ智慧』小学館、2005年
- ・渡辺照宏『仏教』岩波新書、1965年
- ・ローレンス・クラウス著、青木薫訳『宇宙が始まる前には何があったのか』文藝春秋、2013年、225頁
- ・『釈迦の本——永遠の覚者・仏陀の秘められた真実』（NEW SIGHT MOOK Books Esoterica 9）学習研究社、1994年、75頁、187頁

Ⅱ. 討 議 内 容

1) 発表者が、仏教に関する書物を広くかつ深く読み解かれ、自身のオリジナルな解釈に基づく「般若心経」を発表された。いつもながら意欲に満ちた、内容の深く、濃い研鑽に心から敬意を表したい。

※ 討議時間は余裕がなく短くなってしまい、十分に討議ができなかったことをお詫びします。

2) 「空」と「無」について

- 「空」が「無」であるならば、論理的に「何もない」ということになり、「無」のところには何も生じないのではないか？」
- 「無」から「有」が生じるのではなく、「『空』とは有無を超越統合した無分別の次元であり、—(略)—『有即無』であり一如である。『空』は『色』の次元の『有』と『無』を含めて超えた一つの全体であり、この世の現象は永遠不滅の本質をもつものではなく、無常で実体がないが、そのことが事象を生成させているという宇宙の根本原理を表した概念である。」という説明に、思わず「なるほど」と賛意を覚えた。上田先生が「地球ゴマの安定性」をよく例えておられたが、まさにその心境がこれだと思ったからだ。「動と静(=安定)の一体化」したものを調和の例と考えたが、これに当てはまるとも考えた。

3) 「生きる お葬式」というCMがあるが……

- お葬式で「般若心経」を唱える宗派と、そうでない宗派があるようだが……。
- 「生きる お葬式」というCMがあるが、この表現はおかしい。お葬式は、故人を偲び、ご冥福をお祈りするだけではなく、残された者、縁のあった者が、故人の生きてこられた威徳を受け継ぎ、自分を精進してこれからの人生を大切に生きて行かせていただきます、との自戒の意味がある。その自戒を「般若心経」を唱えることで再認識することに意義があるように思える。「残された人が生きるために、故人に御礼を申しあげ、生きることの再認識をする式」が、本当の意味での「お葬式」なのだろう。